

本校には、「父母教室」といって、火曜の午後一時十五分から一時間ほど、チャプレン（学校付きの牧師さん）のキリスト教に関する講話・音楽科教員による聖歌の練習・校長講話等の会に、希望者の方が参加する催しがあります。年六回。すべて火曜日に行われます。

平日の開催ながら、お父様方・お母様方の参加もなかなか盛んで、本当に有り難いことです。先々週の火曜日の父母教室で、稲垣采洋氏の『生き物の死にざま』 草思社という本を紹介しました。稲垣先生は、農学博士で、ご専門は「雑草生態学」。稲垣先生の書かれた本はどの本も含蓄が深く、私の大好きな愛読書のひとつでもあります。

今回紹介したのは、「子に身を捧ぐ生涯」という題の「ハサミムシ」の話。

ハサミムシは成虫で冬を越し、冬の終わりから春の初めに卵を産むそうです。石の下のハサミムシの母親は、卵に体を覆いかぶせるようにして、産んだ卵を守ります。卵にカビが生えないように一つ一つ順番に丁寧になめたり、空気に当てるために卵を動かしたりと、卵がかえるまでの間、餌をとることもなく、飲まず食わずで、四十日以上も世話をします。長い場合は、卵がかえる前に八十日かかった例もあるそうです。

片時も卵のそばを離れず、卵を守り続け、

そしてついに卵がかえる日がやってきます。待ちに待った、愛する子どもたちの誕生です。しかし、母親の仕事はこれで終わりではないのです。ハサミムシは肉食で、ふ化したばかりの幼虫は獲物をとることができません。幼虫たちは空腹に耐えながら、甘えてすがりつくかのように母親の体に集まっていきます。そして…。

なつ、なんと、子どもたちは自分の母親の体を食べ始めます。子どもたちにかじられても、母親は逃げるそぶりも見せません。母親は少しずつ少しずつ、体を失っていきます。そして、失われた体は、子どもたちの血となり、肉となっていきます…。

遠ざかる意識の中で、ハサミムシの母親は何を思っているのでしょうか…。

父母教室が終わり、私が副校長だった頃のある日のことを思い出していました。H君が廊下でグズっているのを発見。理由を聞いてみると、通学途中ハサミムシを捕まえようとして逃がしてしまった事や、上級生とのトラブルについて話してくれました。

一階教員室にH君を呼んで、ネットのハサミムシの画像や記事を一緒に見てみました。

ハサミムシは英語で「earwig」ドイツ語では「ohrwurm」と呼ぶそうで、意味はともに「耳の虫」。眠っている人間の耳に潜り込み、脳に産卵すると言われているのだそうです。

私もH君も、耳のことだけに初耳情報でした。「イヤ、びっくりだねえ。怖いねえ。」などと話しているうちに、H君は落ち着いたのか教室に向かつていきました。まだ話すことがあったのに…。

そうです。私はH君に稲垣先生の本から得た知識を語り、逃げたハサミムシが母親だったとしたら、その方がよかったのかもしれない。君もグズってばかりいて、お母様に心配をかけたりしてないか？と、余計なことを話しそうになっていました。

今考えると、一年生のH君に話しをするのには、まだ早すぎたかも…。やめておいてよかったのかもしれない。

そうこうしているうちに、生活科の担当の先生からこんな話を聞きました。「中秋の名月のために月見団子を作りました。作り終え、試食に入ったときに、一年生のあるクラスの数人が泣き出しました。理由は、こんなにおいしい物をぼくだけが食べるのは申し訳ない。お母さんにも持ち帰って食べさせたい。」だったとのこと。



本校の児童全員に（ハサミムシの）母親の気持ちの伝わる日が、きつといつか来ると信じたくなるうれしい出来事でした。

（立教小学校校長 田代 正行）